

研究課題 : 小児がん周術期患者に対する口腔ケアの効果の調査

研究者名 : 山本俊郎<sup>1)</sup>、青木美空<sup>1)</sup>、金村成智<sup>1)</sup>、渡邊能行<sup>2)</sup>、家原知子<sup>3)</sup>

所 属 : <sup>1)</sup>京都府立医科大学 附属病院 歯科

<sup>2)</sup>京都府立医科大学大学院 医学研究科 地域保健医療疫学

<sup>3)</sup>京都府立医科大学 附属病院 小児科

**【目的】**小児がん患者は、治療後の経過が成人に比べて長く、晩期合併症や患者の発育や教育に関する問題等、成人のがん患者とは異なる問題を抱えている。口腔ケアは、患者の QOL の向上を目指すものであり、小児がん患者特有の問題に対して効果が期待できる。そこで、専門的口腔ケアによる口腔環境ならびに QOL 効果を検討した。

**【方法】**本学附属病院小児医療センターの入院症例で、化学療法、放射線治療を受ける小児がん患者で専門的口腔ケアの依頼を受けたものとした。専門的口腔ケアは、ブラッシング指導、歯石除去、それぞれのがん治療に応じた口腔内保湿、含嗽の指導、あるいは歯科治療を実施した。そして、専門的口腔ケアの実施前後に、口腔内環境に関する評価シートを用いた口腔内診査ならびに口腔水分量と細菌数の測定、患者満足度アンケート調査で評価を加えた。評価シートは、ROAG (Revised Oral Assessment Guide)、口臭、開口量、歯の状態 (歯の治療の必要性)、味覚の変化、口腔粘膜炎の項目について独自に作製した。患者満足度アンケート調査は、CPQ (Child Perceptions Questionnaire) 8-10 質問用紙を用いて、小児の口腔に関連した包括的な健康関連 QOL の評価を行った。なお本研究は、本学医学倫理審査委員会の実施許可を得ている (EMB-C-323)。

**【結果】**評価シートの平均スコアは専門的口腔ケアの介入により減少したが、口腔水分量ならびに細菌数は専門的口腔ケアの介入により変化を認めなかった。患者満足度アンケートの平均スコアは、専門的口腔ケアの介入により減少した。さらに、質問項目毎 (口腔症状、機能制限、精神的安定、社会的安定) においても介入回数が増加する毎に減少した。

**【考察】**口腔内水分量は適正、細菌数はレベル 3 が多くみられ、比較的口腔内の清掃状態は良好であったが、専門的口腔ケアの介入後に介入前と比較すると口腔内環境は改善された。これにより、専門的口腔ケアの成果が数値化され、客観的な評価が可能となった。そして、医療者からの一方向ではなく、患児や保護者の心理的な配慮を含めてより一層のサポートが必要であることが明確となった。

**【結論】**専門的口腔ケアによる口腔衛生状態の向上と維持は、小児がんの晩期合併症への対応や健康管理教育に重要であり、患者の QOL 向上型の専門的口腔ケアに有用であった。